

木村靖二著

『兵士の革命：1918年ドイツ』

黒川 康

本書は国内外におけるドイツ革命研究を批判的に継承しつつ、とりわけあの時代に実際にかかわったローゼンベルクのいまもって古典とみなされる著作に正面から挑んで格闘した記録である。この点においてこそ本書はわが国におけるドイツ革命研究の最高峰の稜線に連なるものとなった。

ドイツの敗色濃厚な一九一八年一〇月三日、民衆の「下からの革命」をそらすため軍部の狡猾な打算によって土壇場でおこなわれたのが、いわゆる「上からの革命」といわれる、遅きに失したバーデン公マクス内閣の成立である。

ローゼンベルクはだがこの「十月革命」はブルジョワ革命の完全な勝利を示すものだと思える。ドイツ帝国はいまやイギリス流の議会主義王国となったと歩調を合わせないまでも、著者もつづく十一月九日に成立した人民代表委員政

府はそれまでの政府との断絶ではなく、十月改革の掲げた基本的目標を追求する「再編十月体制」であると仮設的ながらも慎重に提示している。人民代表委員政府の成立こそが「下からの革命」のダイナミズムによるものである、とここに画期的で革命的な意義をみる研究者にとって著者の仮設的見通しは、批判というよりは戸惑いや杞憂の対象となるかもしれない。

ドイツ革命の歴史的位相については本書の「続編」に期待するとして、本書の狙いは次の点にある。ローゼンベルクは続けていう。これらの平和裡の革命の実際の意義が民衆にはまったくわからなかった。国民大衆はマクス大公の体制とそれ以前の政府との間に何らの相違も読みとらなかつたため、一九一八年一月には、あらゆる革命のなかでもっとも奇妙な革命が起こった。つまり社会民主党を主軸とする帝国議会多数派を支持していた民衆が大公マクスの政府に、いわばもともと自分自身であるものに反乱したのである。これはドイツ国民大衆の政治的素朴さと未熟さを示す以外のなにものでもないのである、と。

著者は圧倒的な文書館史料を投入しつつ、むしろ十月改革が民衆に与えた政治的変動の大きさを論ずる。それまで鬱積していた民衆の広範な不満は、十月改革によって講和と民主化という目標を与えられ、収束されてゆく。がまた

あらたに十月改革が民衆の政治的活性化の一種の点火材の役割を果たしてゆく。中央での議会主義的改革の進行が地域でのこれまでの政治・行政体制の改革志向を動員するきっかけとなり、さらに政府の講和の申し出が、より広範な民衆の活性化を引き出したのである。水兵や兵士の運動は「半意識的集合体」から「革命的結集体」へと孵化し発展していく。著者の張り巡らす論陣は極めて堅牢であり、つき崩せそうにない。

以下、キールの水兵は十月改革の方向を承認し、その障害とみなされた海軍将校団と激しく対立する。ハンブルク、ハノーファー、ミュンスター、ルートヴィヒスブルクなどこれまでわが国ではベルリンに比べてほとんど等閑視されていた地域での兵士の運動においても十月改革にみられる政治方向を自己の改革の基準とする発想が底流をなしており、陸軍将校団はこの時流に逆行する遅れた組織でしかない。十月改革の前進きの評価から、兵士は新しいドイツは普通選挙による国民多数の意志の確認、すなわち国民議会によって真の正統性を獲得すべきだとする。これが人民代表委員政府の安定ととりわけ社会民主党の影響力の拡大の最も重要な支えとなった。

こうした委曲を尽くした説得力のある叙述のあとで、著者は「兵士革命の運動と思想」を内在的に整理しようとする

る。著者がまず取り上げるのは、兵士のなかには国民意識とでもいうべきもの、「良きドイツ人」たらんとする意識、が定着しているということである。兵士の中にドイツ国家の一員であるという「国家主義的発想」が根付いたことである。評者は本書の叙述においては他を圧して第一位にするほどに兵士の国民意識を開陳した史料が引用されてはいないとの印象を抱いていたため、一瞬成程と思ったのであるが、著者はこの国民意識ないし国民の一員をなしたいという期待は、すでに戦前から形成されていたことは疑いないが、とりわけ大戦がそれを末端にいたるまで浸透させたと思われるとしている。

著者はこの「国民意識」がドイツ革命において一体いかなる機能を果たしたのかについてはまず次のような指摘をしている。「運動の成立の前提として、軍のヒエラルヒーが持つ、著しく不平等で抑圧的なあり方、そうした体制の体现者としての将校団に対する、兵士の間での憎悪と反発の広範な蓄積がある。しかし、一方で、戦争を、ドイツにとつての敗北に終わらせたくないという『良きドイツ人』としての意識、それを支える城内平和体制などの戦時体制の存在が、蓄積されたエネルギーの噴出を抑える、強力な蓋をなしていた。」（強調評者）この「意識」と「存在」における「強力な蓋」にもかかわらず、水兵の場合は兵士に

比べて領域化が進行し不満の凝集度が高くなり、ために不満がいち早く噴出したのであった。

ここでは国民意識にまず革命を押し込める「蓋」としての外在的な抑止的役割がふられている。しかしまた著者は兵士の運動をあくまで内在的に自律的に包み込もうとして国民意識をも革命の内側でこなそうとする。それは次のような表現をとることになる。「特権層の排除、構成員の平等化の徹底などは、垂直的方向での国民としての平等への強烈な願望に他ならない。この対等の地位に追いつきたいという志向こそ、兵士運動の規定的原動力なのである。」兵士運動は軍の内部の構成員の対等化を実現し、他方、軍を民主化された国家の中に位置付けるといふ、軍の二重の国民化の試みに他ならないのである。」この際、戦時体制から十月改革へと、「蓋」の「存在」の部分が変わったため、バンドラの箱が開いたのではなく、国民の「意識」も「存在」の変化によって帝制の拒絶から民主的国家への志向へと変貌を遂げるのであった。著者はここで、兵士というよりはひろく人間洞察の領域に踏み込んで苦吟しているかのような。そして最後の総括である。「特権を持つ支配層の排除とその後の対等の条件のもとの、能力と勤勉による上昇こそ、兵士運動の担い手が期待した、来るべき国民軍の構造であり、また新しい社会像であったのである。ここ

に兵士運動が革命期の諸運動のなかで、独自の位置を与えられるべき根拠がある。」ここでは国民意識は「国民軍」（もしくは「人民」(？)軍)という表現にだけ出てくることに注目しておこう。

著者は冒頭で、政治的次元への集中、政治的一元論を排するとしているが、本書は「無名の」兵士による運動の「政治」から「ドイツ政治」の世界を総合的に照射しようとしている。著者は、ローゼンベルクによる兵士運動の「非政治性」の指摘に反発し、兵士レーテの方向性が基本的には社会民主党と一致していること明らかにした。これでは本書は「上から」も「下から」も社会民主党の前向きな評価に徹しているのではないか、という批判を著者は覚悟しているに違いない。著者はドイツ近・現代史をナチスに間断無く収斂していく「負の遺産」の歴史としてみる史観に対して、明らかに抵抗している。「ドイツ史上最も自由な国家であるドイツ連邦共和国」という「現在」から歴史をみるとまではないかないまでも、ヴァイマル共和国を支える民衆の力をクローズ・アップしようとしている。

思うにフランス革命やロシア革命の研究においては全世界への「解放のメッセージ」の肯定的存在が大前提である。ところが一九一八年のドイツ革命における普遍的なメッセージはなんだろうか。ドイツ革命は一国内にとどまってい

るのではないか。わが国のドイツ革命研究は社会民主党に厳しいものがあり、「失敗」「未完」「流産」がつきまとい、いわば高揚した挫折感とでもいうべきものが基底音をなしている。ドイツ革命が産み落としたものはナチスという鬼子だったのである。著者は積極的にドイツ革命のメッセージを提示し、比較研究の資としたかったに違いない。あるいはこれは本書の方法的視点が、柴田三千雄氏の複合革命論と「国民国家」論の圧倒的な影響下にあることから、評者が本書をはじめ一読したときに抱いた印象、わが国においてはいまやロシア革命についてドイツ革命も「フランス革命」となった、とも無関係ではないかもしれない。

南のバイエルンから北方の革命を見やる者が、ミュンヘン革命の運動と思想を整理しようとするとき、「良きドイツ人」という国民意識はもとより、ゆずっても「良きバイエルン人」といった地域意識を、整理の先頭に置けるだろうか。それはたしかに十月改革はバイエルンにも政治的インパクトを与えたが、これに敏感に反応したのはもっぱら政府と諸政党であった。十一月七日に王家を倒壊させる革命に方向性を与えたのは独立社会民主党のイニシアティヴである。これは否定できない。二〇世紀の革命は民衆の自然発生性と政党組織のコンピニションがどこまで絶妙であるにかかっている。どちらに秤を傾けすぎてもそれは偏重とな

る。バイエルンでは一九一一年一月までのいわば社会民主党がイニシアティヴをとった時期、兵士レーテは沈黙して革命の表面には出てこない。著者は、一九一一年にはいると、兵士レーテは反政府的姿勢を強め、一部では独立社会民主党などとの連携も実行して、初めて政治化の方向に進むが、運動としての存在はもはやなくなったとみなされるとするが、評者はこの個所はよく消化できなかった。バイエルンでは一月蜂起や国民議会の選挙結果にたいする反発・失望感から兵士はようやく革命化する。

著者は最後に「国民的」な兵士レーテ構成員のナチスへの移行、労働者レーテに比べてその移行度の高率を指摘している。本書の論理の筋道からいえばこの指摘は必要ないが、著者はこれをたんに民衆のもつ両義性の問題として取り上げたのではあるまい。著者は、兵士運動のもつ「国民意識」(ナショナリズム)の強靱さに心中驚いたのではないか。ローゼンベルクのいう政治的素朴さとは国民意識の裏返し表現にすぎないのではないか。兵士レーテの目指した新しい社会像への熱望が共和国において挫折に転じ、かりにこれをファシズムが利用したとするならば、ファシズムになだれ込む民衆の意識も諒解されねばならない。ナチ党はその一九一九年の誕生の瞬間から、「ドイツ人である」という国民意識の総動員にかかっている。こうした運動か

木村靖二『兵士の革命：1918年ドイツ』（黒川）

ら生まれたナチ「国家」は、「帝国の敵」を強制収容所に暴力的に押し込めることによって「国民的統合」の装いを凝した歪な「国民国家」であった。それは一九世紀のドイツ国民国家の成の果の姿であるといえよう。

時代が大きく変わるとき人も兵士もさまざまな精神的国境の虚偽性に気づいたであろう。国境、それが原因となつて生ずる戦争、民族、人種、社会的階級などはいなる幻影である。さらには人間はナショナルリズムというタテの障壁によってよりはむしろ階級、職業、文化などヨコの断層によって分離されている。兵士は軍人として住んでいたタテの世界に倦み、ヨコの世界によく瞳を凝らしたのだろうか。

いささか評者のモノログに終始してしまったが、冒頭に記した本書に対する評価にはいささかの揺ぎもない。

（木村靖二氏は前本学史学科教授、黒川康氏は本学史学科教授）

（東京大学出版会 一九八九年五月二五日刊 B5判
二七八＋一九頁 四六〇〇円）